

〈研究ノート〉

海洋中国のメインプレーヤー・ 閩南人の千年史

——台湾「族群」を知るための一考察

長谷部 茂

要 旨

近年、東アジアの歴史を、海洋の視点から捉えようとする研究が注目を集めている。従来、大陸（領土）中心に説かれてきた「国家」の歴史に、貿易中心の「港市」の歴史を重ね合わせ、世界史を人、物、金のダイナミックな流れに沿って見直す動きである。

東アジアの海洋は、漢代から始まったといわれる中国沿岸と東南アジアを結ぶ交易ルート、8～13世紀イスラーム商人によって構築された一大交易ネットワーク、11～17世紀漢族海商、海盜・倭寇の活動と、16～19世紀ヨーロッパのアジア植民の隆盛にいたるほぼ2000年の間、多数の民族と雑多な集団が興亡する世界であった。その後半史1000年において常にメインプレーヤーであり続けたのは、南中国沿岸の福建及び広東の漢族、中でも閩南人と客家人であった。言うまでもなく彼らは、現在台湾の人口を構成する四大族群（エスニックグループ）の二つ、合わせれば8割以上を占める最大多数のグループである。

1980年代後半以降、台湾では、民主化の波の中で全住民の融合、統一を目指す「台湾人アイデンティティ」の確立が叫ばれると同時に、それと矛盾するような族群同士の対立や多様化の主張も生まれている。いずれも複雑な政治的背景を持つが、それが単に、遥か昔どこからやって来たのかという同郷人の意識に止まるのであれば、その対立も多様性も、無意味であり、生産的でない。閩南人、客家人、或いは外省人、原住民のたどった歴史とそこから形成されたそれぞれの特性（又は民族性）にまで遡り、それを海洋世界に結び付けることによって、新たな台湾史が浮かび上がるのではないか。本ノートでは、その最初の試みとして閩南人の歴史を取り上げた。

キーワード：閩南、客家、族群、海洋中国、台湾

一．台湾歴史研究の方向性

台湾は近年、国際的に孤立し内部に諸矛盾を抱えながら、めざましい経済発展と民主化、社会の成熟化を実現した。新たな台湾人としてのアイデンティティも形成されつつある。台湾の歴史研究は、このような台湾のダイナミックな変化とともに誕生し、発展を続けている。

1980年代の民主化以前においては、台湾史というジャンルそのものが公認されておらず、自国の歴史といえば中国史であった台湾において、台湾史研究のここ3、40年の進展は、当然のことと言えるかもしれない。しかし一方で、その研究対象・領域には少しく偏りがあるようにも見受けられる。

例えば、台湾では1895～1945年の半世紀に及んだ日本の植民地統治を、その後の台湾発展の基礎を作ったものとして評価し、微に入り細を穿った研究成果が続々と発表されている⁽¹⁾。戦前の植民地支配を「侵略」の一字を以て全否定し、正面から取り上げること避けてきた日本にとって、それは日本の近代を見直す契機ともなった。日台共同研究の盛況は、日本人にとって誠に喜ばしいことである。しかし、台湾史の全体像を解明することにおいて、それが好ましいことであるのかどうかは、別の問題である。

日本統治時代が研究テーマとして特に好まれるのには理由がある。日本の場合と言うまでもないが、台湾について言えば、第一に、現代史（戦後史）を取り上げるのが難しいこと。原因は政治情勢にある。台湾の民主化と言論の自由化は、戦後の台湾を統治してきた国民党政権に対する批判から急速に進んだ。当然、その政権下にあった時代の台湾の歴史はネガティブに捉えられる。しかもまだ私的な（少なくとも家族の）記憶の残るこの時代を学問的に研究することは気の進むことではないし、客観性を期することもできない。第二に、中国史との関係を取り上げるのが難しいこと。

兩岸関係、つまり中国大陆との「一つの中国」をめぐる問題がある。これも政治の問題だが、より深刻な、いわば国体の問題である。台湾史の研究は実際、正統な中国政権を自認する国民党への批判とほぼパラレルの関係にある。台湾史の見直しはそのまま中国史への疑義となり、台湾独立の理論的根拠を提供するものとも疑われる。日本の台湾統治時代の前後は、どうしても中国大陆との関係、中国史の中の位置づけを論ずる際に政治的立場を問われことになる。第三に、日本統治時代は文字史料の蓄積が圧倒的に多いこと。台湾史研究者に日本語学科出身が多いのはそのためであろう。また時代区分が明確で、50年で完結している点も研究対象としては取り組みやすい。オランダ統治時代の文献の翻訳や1950～60年代の国民党文書の分析も進んでいるが、日本時代には遠く及ばない。第四に、これは少しうがった見方であるが、日本時代は、政治、社会の構造的理解が容易である。事の是非は別として、統治被統治、支配被支配の対立、上下関係から把握することができる。

日本時代の研究成果や発信が多いために、台湾のここ半世紀の発展を、直に日本統治時代の近代化に結び付けるような視点も見受けられる。とくに日本の研究者は慎重でなければならない⁽²⁾。

一例を挙げれば、台湾に『認識台湾（歴史篇）』（国立編訳館、1998年初版）という中等学校を対象とした歴史の教科書がある。中国史のほんの一部としてしか台湾が教えられて来なかった台湾では、画期的なことである。

この本は、日本の台湾統治自体を肯定するものではないが、これまで反日的、否定的な評価しかなかった日本統治時代の台湾について、より客観的に日本を評価する記述が出てきたことでも画期的であった。この中では、日本のインフラ整備等の近代化施設とともに、日本統治下の台湾社会の変遷について、(1)人口の激増、(2)放足断髪（纏足・弁髪の廃止）(3)時間厳守の観念の養成、(4)遵法精神の確立、(5)衛生観念の確立の5点、挙げられている。(1)を除けば、生活習慣に関わるものである。これ

らは、日本時代を経験した台湾人の中で、ごく批判的な人物の口からも語られる共通認識だと言ってよい。このような新たな習慣の養成が、近代化に必要な条件であったことは否定しない。しかし、これらの要素が直ちに戦後、1960～1980年代、アジアの小龍の一つと言われた経済発展や、それ以降の民主化に直接繋がるかといえ、それは短絡的に過ぎるであろう。台湾の戦後の国民党統治下、そして日本統治以前の約250年にわたる清朝統治下についても、台湾社会の変遷を見ていかなければならないのは当然である。

1980年代初め、戦後日本の復興を奇跡ととらえた欧米人と、そのような自覚と自信を持った日本人は、明治維新、戦前の近代化の遺産や戦後の国際環境だけでなく、いやそれ以上に日本の長い歴史と日本人の特殊な民族性に着目した。ところが台湾の達成した同様の奇跡に、同様の議論が起こったとは、寡聞にして知らない。

戦後、台湾は、日本の統治から脱して、自らまったく預かり知らぬ間に、中華民国という国家体制の枠組みの中に、大陸中国から来た国民党政権の統治の下に置かれた。外来政権によって政治の道を閉ざされていたという環境もあるが、その中で、活発、果敢に旧宗主国の日本と連携し、アメリカをはじめとする諸外国との貿易を進めてきたのは、やはりそこに台湾独特のものがあつたと言わなければならない。日本、アメリカとの断交や大陸中国との複雑な関係の中で、台湾経済発展の原動力となった要因として、その起業家精神、国際貿易のセンス、血縁地縁同業者間のネットワークの活用等が指摘される。これらの要因は、あきらかに日本人から学んだものではない。いわゆる華僑の特徴とも相通ずるが、台湾人（漢族系台湾人、すなわち閩南人、客家人）の持つ特徴といってよいだろう。台湾人の海洋的性格、商人的気質がその成功の元にあつたと筆者は考える。それを日本人のように簡単に民族性と言えないのは、多民族、多様性を強調しなければならない台湾の事情であるかもしれない。

二. 「台湾史観」の問題点——さまざまな「史観」の障碍

日本の自虐史観とは、戦前において日本は他のアジア地域を侵略し、悪いことばかりしてきたとする史観だが、それが日本の近現代史研究の進展を妨げてきたことは、近年、ようやく認識されつつある。台湾史においても、同様にいくつかの独自の「史観」が台湾史の理解を妨げているように思えてならない。

第一に、日本の自虐史観とは逆に、常に外来民族（集団）によって虐げられてきたとする他虐史観である。その外来民族（集団）の一つが日本であるため、日本人としては言いにくいことではあるし、確かに日本の領有とその後の中華民国政府の移転は、まったく台湾民衆の与り知らぬところであったから「他虐」とは言えないまでも受動ではあったと言える。しかし、それを遡って、台湾の歴史全体をそのように位置づけるのは、事実と異なる。

多くの台湾通史が自らの歴史をオランダの「苛酷な」植民地支配から始めることに筆者は常々違和感を持っていた。当時のオランダには、大量の漢族移民を海の向こうから強制連行するような力はない。動機、境遇はさまざまであろうが、数万人が海を渡ったのはわずか数千人のオランダ人に願使されるためであるはずがない。ここに新天地を求めた閩南人の意思が働いているのである。もとより先住民（以下、台湾の呼称にしたがい「原住民」と称す）が何の利害もなくオランダ人に従っていたはずもない。あくまで主体は閩南人であり原住民であった。続く鄭成功の王朝も、反清復明（明朝再興）を掲げていたとはいえ、外来政権というにはあまりに閩南色が強い。そして外族・満洲人の清朝に降伏したのは、中国大陆のすべての漢族と同じ運命であり、清朝が外来政権であったのは台湾に限らない。なによりこの史観で見ると、清朝時代の台湾において漢族は、原住民に

とって完璧に他虐者であったことになる。

第二に大陸中国——漢族系台湾人にとっては祖先の地である——に対する複雑な感情からくる「疎外史観」である。中国史研究はこれまで「中原に鹿を逐う」黄河文明発祥の地である北方を中心とした「陸地史観」であった。文明が北から南に向かうのであれば、台湾漢族の故郷、福建と広東は、辺境である。その辺境からさらに南（東）に位置する台湾は、最果ての地、もともと同心円状に広がる華夷秩序の外縁ということになる。台湾は、文化程度の低い沿岸の窮民が食いつめて、或いは罪を得て逃げてきたところだから、匪賊が跋扈する荒廃した地域であったというような理解が、ここから生まれた。日清講和条約で清朝がやすやすと台湾を日本に割譲したことが、この「疎外史観」を決定づけた。そして戦後、中華民国となった台湾は、中国文化の正統な継承者として、ほとんどの人がその土を踏んだことのない中国を代表することになり、虚構を重ねることで、さらに増幅された。「化外の地」という呪縛がそれを象徴している。

「化外」とは、中国文化の及ばないことを言う。台湾を割譲する際に李鴻章が伊藤博文に語ったとされ、現在でも、清朝は台湾全島を「化外の地」と認識していたのだと、少なからざる日台人士がいまだに信じている。しかし、これは明らかに事実ではない。以下に掲げる外務省外交文書に残された李鴻章の発言を見れば一目瞭然である。

李伯（李鴻章）臺灣ト黒龍江トハ霄壤ノ差アリテ全ク比較シ得ヘキモノニ非ラス黒龍江ハ瘠土人煙希少ニシテ未タ政治ヲ施カサルニ反シ臺灣ハ土地肥エ物産饒多民亦王化ニ服シ官署ヲ設ケ吏員ヲ置キ純然本土ノ如シ⁽³⁾

これは、伊藤博文が講和条約の条件として台湾割譲を提起したのに対し、李鴻章が、占領していない土地まで要求するのかと反論、それに対し伊

藤が、清国はロシアに対して東シベリア（外満洲，黒龍江）を占領されてないのに割譲したではないかと言ったのに答えたものである。ここで李鴻章が化外の地としたのは、東シベリアであった。

台湾における「化外の地」が「蕃人」（原住民）の住む土地（東台湾）を指すことは、明治7（1874）年の台湾出兵の原因となった原住民による琉球漁民殺害の際、清朝が「台湾の番（蕃）民は化外の者」つまり原住民の住む地域は清朝の治政が及ばないと答えたことが、出兵の根拠となったわけであるから、清朝も日本も、その区別をよく知っていたと言わなければならない。清朝の皇帝は、漢族と「蕃人」を完全に分けて考えており、漢族が「蕃人」と往来することに慎重であった⁽⁴⁾。少なくとも「蕃人」を王化することは全く考えていない。西域諸民族に対するのと同列であった。ちなみに王化は中国文化圏になることであるから、台湾原住民は、化外の民と言われても痛痒を感じる必要はない。

「台湾＝化外の地」を台湾全島と理解、曲解、又は故意に喧伝したのは、台湾統治時代の在台日本人であった。近年、台湾では、中国文化に対する否定的感情から、この見方を継承し、台湾は中国（清朝）に支配されたこととはないとする根拠として、むしろ喜んで使われてきたが、日本人（内地人）は明らかにこれを台湾人（本島人）蔑視の表現として使っていたし、台湾人も本来そう理解していたはずである。

近年「海洋国家」としての中国が提起され、中国史そのものの見方が大きく変わりつつある。詳しくは後述するが、海洋から見た閩南、広東は、海洋中国の中心であり、先進地域であった。

三. 台湾四大「族群」それぞれのルーツと特徴

台南市郊外にある国立台湾歴史博物館（2011年正式開館）は、「台湾人」のルーツを壮大なスケールでたどる台湾の現代を象徴する博物館である。

その入口に「誰が台湾人か (Who are the Taiwanese?)」と題する次のような告示がある。後半の一節を引用する。() 内は併記された英訳の該当箇所である。

台湾は、族群 (ethnicities)、言語と文化の異なる人々によって成り立っている。したがって台湾人とは、言語や族群で切り分けることのできない自己確証 (self-affirmation) である。台湾を我が事とし (identify with Taiwan)、台湾に関心を持ち、台湾を愛し、台湾を受け入れ、そしてこの土地と一緒に暮らす人々は、誰でも、「私は台湾人である」と大きな声で名乗ってよい⁽⁵⁾。

1980年代後半の民主化以降に定着した四大族群——閩南人(福佬人)、客家人、外省人、先住民(原住民)——という言い方は、民族、言語(方言)の違いに歴史的な境遇の違いを併せた広義のエスニシティ概念である。客家人はもともと「本島人」として閩南人と区別されてこなかったが、閩南人の間でも近年、泉州か漳州かという出自の違いがことさらに強調されるようになった⁽⁶⁾。世界的な多様化多元化を求める風潮は、とうに忘れられてきた遙か昔の移民の記憶を呼び覚ましたかのようである。しかし彼らがそれぞれの出自について正確な認識を持っているかどうかは疑問である。

中国への里帰り渡航が解禁(1987年11月)されてから、台湾人の「尋根」(ルーツを尋ねる)の旅がひところ盛んになったが、現代中国への反感と拒否の感情から、そのルーツは家族(家系)にしか及んでいない。自らの祖先が海を渡った理由と背景、出身地が持つ歴史文化に及ばなければ、「尋根」の旅は終わらない。

原住民の場合、百年単位の差別の歴史から、民族の尊厳を回復したい思いはさらに切実である。2017年8月に「平埔族」が新たな民族グループ

に認定されて九族と呼ばれていた民族が17族を数えるまでになったが、実際のところ、多くの民族がすでに伝統を失っている。外省人について言えば、彼らの出身地や方言の違いは千差万別である。中国大陸の各省からやってきた外省人を一つの族群に分けるのは可能なのか。これも疑問である。

前掲の告示が、「台湾人」というアイデンティティを、異なる言語とエスニシティを包摂し、それらを主体的に乗り越えようとする現在進行形の概念であるとするのは、このように細分化する族群によって台湾社会が凝集力を失い解体に向かうのを恐れているからに他ならない。歴史的背景から見れば、凝集力は、それぞれの族群のもつ特徴の上に成り立つべきだと思うが、その努力が為されているようには見えない。

ここで、四大族群の構成をあらためて提示する。ちなみに現在、台湾の人口は約2,359万人（2018年12月）。その大多数は、中国大陸から様々な時期に渡来した漢族とその子孫である。

- (1) 閩南人（本省人。漢族系の約70%）。

祖先が福建省南部（閩南）の出身で、日本に植民地化される以前に台湾に移住した人々。「福佬人」と自称する場合が多い。

- (2) 客家人（本省人。漢族系の約15%）

福建省や広東省の出身で、日本に植民地化される以前に台湾に移住し、もともと客家語を話していた人々の子孫

- (3) 外省人（漢族系の約15%）

蒋介石政権に接収されて以後、台湾に定住した人々

- (4) 原住民（約50万人。全人口の約2%）

文化、言語の異なる様々な民族を含む。現在17族が公認されている。

この他に、族群予備軍ともいうべきグループとして、外国人労働者と中国大陸や東南アジアから結婚して台湾に移住してきた女性及びその子女

を、新移民（約 65 万人、全人口の約 3%）と呼んでいる。

構成員（エスニックグループ）が持ち寄ったそれぞれの文化の融合を台湾文化とするならば、それぞれの歴史の総合が台湾史だとするならば、台湾の文化と歴史は、原住民と漢族のそれぞれのルーツから説かねばならない。

台湾の歴史家・林淑美は、その著『清代台湾移住民社会の研究』（汲古書院、2017 年 7 月）の中で、「筆者の初発的な問題関心は、このように複雑かつ多様な人間集団を内包する台湾社会が、どのような歴史的過程を歩みながら現在に至ったかを解明することにある」とし、時代を清代、事象を台湾移住民集団と原住民との関係として、「清代台湾移住民と原住民を包括した歴史世界の構築」を目指したという。族群それぞれの歴史と族群同士の関係に注目し、それを台湾史の中に組み込もうとする意図において、貴重な研究だと思う。筆者が試みようとするのは、内容はいまだ空疎だが、同様にスケールの大きい台湾史の枠組みである。

本ノートでは、まず台湾人口の最大多数を占める閩南人のルーツを、その最初の考察として進める。当然ながら、客家人や原住民、また歴史は浅いが外省人にも同様の考察を今後進めるべきだと思っている。

四. 閩南とはどういう地域か？閩南人とはどういう人々か？

「閩」とは福建省の古称であり略称である。閩南とはつまり福建省南部を指す。この地方は、中国大陆において、同じ沿岸の他の地方と比べても、非常にユニークである。『華僑・華人事典』⁽⁷⁾の記述によれば、福建省（閩）は「西の江西省、北の浙江省、南の広東省との境はいずれも山地であり、江西省との境をつくる武夷山脈（高峰は 1,500～2,000m）が東北から西南方向に連なる。これと平行して省中部に高原状の戴雲山脈が走る」山地丘陵が省全体の 95%を占める土地である。同地の原住民は「閩越」

と呼ばれた少数民族で、華中からの漢族が入植して漢化した（つまり中華となった）とされるが、その時期には諸説がある。西晋末年の「八姓入閩」、唐初の「陳政入漳州」等々。それ以前にも中原からの移民はあったであろう。ここでは、大量の漢族が当地に流入し、開発が急速に進んだ五胡十六国の一つ、閩王の統治時代（909～945）から北宋にかけての時期（10世紀）と考える⁽⁸⁾。漢化は南の広東省よりも遅れた。

福建省は、亜熱帯の温暖な気候であるが、平地が少ないので、長い間稲作は振るわず、主食の米を他省と海外からの搬入に頼る、いわば陸の孤島であった。省内もまたいくつかの陸の孤島に分断され、現在でも互いに意思疎通の難しい18の方言（閩語）を持つ（閩北と閩南では言葉が通じない）。山地の資源を利用した「木材、桐油、樟脳や砂糖、陶磁器、鉄器等の特産品を開発」し、また海岸の立地を利用して「漁業、塩業、養殖業、造船業を興し航海術を発達させた」という。南部の閩南地方はとくに泉州などの貿易港を拠点として商業海運を展開し、「商業的海運で中国をリードした」⁽⁹⁾。つまり中国における海洋貿易の先進地域となったのである。中国風の帆船（ジャンク）はおもに閩南の泉州港、厦門港（漳州）から外洋に乗り出していった。閩南は福建省の南部であるが、『華僑・華人事典』は、福建人と言えばほぼ閩南人を指すと断った上で、福建人を「中国でもっとも商才にたけた」人々と形容している。

現在海外に居住する華僑、華人、華裔と呼ばれる漢族系の人口は、正確な統計は期しがたいが、中華民国（台湾）行政院僑務委員会発行の『僑務統計年報』は、2018年末の世界華僑・華人人口を4,869万人と推計している。閩南出身者はこのうちの約半数を占めるという。この数字は、台湾在住の閩南人（約2,000万人）を算入していない。明末から清代にかけて台湾に移住した閩南人も、閩南という同じ風土から同じ文化習慣を身に着け、おそらくは、その文化習慣に従って当たり前のように海を渡ったはずである。つまり閩南人という同じグループの一群が東南アジアへ向かって

華僑となり、別の一群が台湾に渡って台湾人になったのである。ちなみに『華僑・華人事典』では、閩南出身華僑の特徴として「内部では団結を固くし、対外では行動を一致させる」「素朴・勤勉で、賢く商売がうまい」等の性格を挙げている。

台湾に目を向けよう。台湾に最も早く渡った閩南人の一群は、明代末、17世紀前半には定住している。その移民の歴史は400年に及ぶ。最も新しく移住してきた一群でも150年を経ている。他の族群との百年単位の共存の歴史を持っているにもかかわらず、前述のように彼らは今もって、閩南にアイデンティティを感じている。これはかなり特殊なことだと言わなければならない。同じく閩南をルーツとする東南アジアの華僑においても同様のことが言える。その求心力は、台湾のもう一つの族群である客家人の場合は、さらに顕著だといえるかもしれない。中国歴代の王朝交代期の戦乱を避けて、徐々に中原から南下して、南中国全域に遷ったとされる客家人は、どの地方に移っても「客」の立場であったことから、この名称となった。他と区別される所以はその方言・客家語である。中華の正統な継承者であるという意識も強い。ちなみに上記の『華僑・華人事典』では、客家人を「刻苦して勤労する精神を身につけ」「女性の労働参加などの伝統慣行を生んだ」と紹介している。広東省に移入した客家人は、閩南人の後を追うように海外に向かったのである。

五. 海洋貿易から見た中国

『後漢書』に、大秦王安敦の使者が日南郡（現ベトナム中部）に、象牙、犀角、玳瑁等をもって入貢した、という記事がある。西暦166年のことである。大秦王安敦とは、東ローマ帝国のマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝のこと。その「使者」の「入貢」であったかどうかは定かでないが、いずれにしても、おそらくはインド洋を渡って、外国の船が珍奇な物

産を携え中国との交易を求めたのは確かである。前漢において安息国（イランのバルティア王国）との交易の道は開かれたが、大秦国を目指して陸路西に向かった甘英は、シリアに達したものの、地中海を渡ることなく引き返しているから、ベトナムに達したこの船が、海洋中国の幕開けであったと言える。

漢代から唐代にかけて、マレー・インドネシア海域やインド洋に勃興する港市国家との海洋貿易は盛んに行われた⁽¹⁰⁾。ただ当時の海洋貿易は、朝貢という名の官営貿易であった。朝貢とは字義からいえば、朝廷（中国の王朝）に対する貢物の意味であり、公式には中国皇帝の徳を慕い服従の意を表わす周辺諸国からの外交使節であった。貢物にはそれに数倍する返礼の品があり、貢物もすべて朝廷の用に供するわけではないので、実質的には相互間の物品の交流、つまり貿易関係が発生した。唐王朝は堂々たる世界帝国であったから、周辺国家の朝貢は拒まず、回数も制限しなかったが、財政的負担は小さくなかった。朝貢貿易は、唐末五胡十六国の乱世を経て、宋代になると復活するが、まもなく北方の外族（金、遼）の圧迫により、財政的余裕がなくなると、この制度を維持できなくなった。官営の朝貢貿易は、後述する市舶司制度に移行し、官による大枠の規制はあるものの、実質は民間貿易に取って代わられる。王朝の財政は大きく海洋貿易に頼ることになり、民間貿易は盛況を見るに至った。その形勢は元代にますます増大し、ほぼ400年に及んだ。そこにはイスラーム勢力が大いに関わっているが、それについては後述する。

モンゴル王朝であった元を駆逐した漢族王朝である明朝は、海禁（民間の海外渡航、交易の禁止）を実施した。ここに朝貢貿易が官営独占色を強めてまた復活し、鄭和艦隊の外洋派遣によって朝貢国、朝貢回数は急増したが、広大な唐王朝とは違い、貿易はまもなく入超となり、財政難のため制限するにいたった。一方、祖法とされていた海禁はかえって強化され、官営以外の貿易、民営船の海外渡航が厳禁された。しかし、すでに世界の

海洋貿易ネットワークに組み込まれた中国が孤高の道を歩むことは不可能であり、一方で貿易の利益は魅力的であったため、ここに非合法となった民間貿易が盛んになる素地ができた。

中国南部沿岸である広東省、浙江省、福建省は、中国における海洋貿易の拠点であった。そして、海洋貿易で活躍したのは広東人、浙江人、福建人（閩南人）であった。前述のとおり福建省の開発が進むのは唐末 10 世紀に入ってからである。唐代以前の拠点は交州（ベトナム）と広州であった。

広州についていえば、7 世紀には中国最大の貿易都市となっており、714 年に中国で最初の市舶使（この時点では役職名のみ、のち市舶司として役所名となる）が設けられた。年間 60 数万の外国商人が訪れたという。879 年、黄巢の乱が広州に及んだ時、異教徒 12～20 万人が殺された。この数字を誇大と見ても、万単位の外国人が広州に居住していたことは確かである。この事件が災いしたばかりではないが、これ以降、宋、元、明の約 600 年間、閩南（泉州、漳州）と閩南人が、海洋中国のメインプレーヤーになっていく。清朝以降、貿易ルートは、主に乗船の変化により、水深の浅い泉州港を避け、明港（寧波）—— 日本、広州港 —— 東南アジアに移ったが、とはいえ閩南人は、船員として船主として、また後述する海商、海盜又は倭寇として、それぞれの海域で活動するメインプレーヤーを演じた。そして最終的（20 世紀）に、華僑、そして台湾の主要グループとなるのである。

六. イスラームと中国、イスラーム商人と閩南人

唐代以降の海洋中国にとって、イスラーム、ことにイスラーム商人は決定的な役割を演じた。

アッラーの啓示を受けたムハンマドは西暦 622 年、マッカからメディナへの移住（ヒジュラ、イスラーム紀元）を敢行し、ウンマ・イスラミーヤ

（イスラーム共同体）を作り上げた。イスラーム勢力は、7世紀半ばには、ササン朝ペルシャの全領土を併合し、シリアとエジプトを征服、コンスタンティノーブルを包囲した。奇しくもほぼ同じ時期（618年）に中国を統一した唐王朝にイスラームの使節が来たのは、651年のことであった。まもなくシルクロードを通じて、イスラーム・唐二大帝国は交易を始めるが、実は海洋を通じた交流がこれに先んじたとする説がある。ムハンマドが在世のとき、四人の賢人を中国に派遣したという伝承である。一賢は広州、二賢は揚州、そして三賢と四賢は泉州に来て、この地で死んだという。泉州市内にはその墓所（三賢四賢墓）もある。歴史的考証に堪えない説ではあるが、イスラーム商人は、遅くとも8世紀前半には広州に来ていた。

イスラーム帝国との貿易は厚く保護された。唐文宗（在位826～840）は、輸入品の重複課税を廃止して、揚州（江蘇省）等の地方官吏に告諭し、便宜をはかった。揚州は当時、南北産品の集散地であったが、それは対外貿易でも同様である。多くのイスラーム商人がここに居住した。760年に起きた宋州刺州の反乱では、揚州在住の外国商人数千人が殺された。殺されたのは外国人排斥でも異教徒排斥でもなく、金銀財宝を略奪するためだったという⁽¹¹⁾。広州における虐殺事件の1世紀前のことである。

唐王朝の崩壊にともなう群雄割拠（五代十国）の中で、前述のとおり福建に閩王国が10世紀初めに誕生した。ちなみに隣の広州に割拠した南漢国の劉氏一族は、アラブ系であった可能性が高いといわれている。

閩王国（909～945）を打ち立てた王審知は、唐末の混乱を避け、いまだ未開の地であった福建の開発を進めた。また文人・名僧を集め、文化の向上にも努めた。すでにイスラーム商人との往来は盛んであり、海洋貿易で利益を上げることができた。特産品の樟脳や砂糖、陶磁器等は、輸出品として開発されたものであり、その後長く中国随一と称された造船術や航海術は、この時イスラーム商人から学んだものであろう。王審知は、その善

政により開閩王と称されている。

台湾の研究者・張彬村は、その論文「宋代閩南海洋貿易の習俗はどのように形成されたか」⁽¹²⁾の中で閩南地方は、「唐の滅亡から宋の初めまでのほぼ90年間、ほとんど政治勢力の干渉を受けることなく、自身の経済的必要だけから海外との貿易を行えた稀有の地域であった」と述べ、「閩南地域は自主独立の海洋国家になった。これは中国史上、空前絶後のことである」⁽¹³⁾と述べている。

張彬村はまた、イスラーム商人は「西暦700～1200年にかけて世界各地に勢力を拡張し、東アジア水域に到達して南洋貿易のネットワークを掌握した。唐代後半期になると、中国と諸外国との海洋貿易を支配し、中国を彼らの貿易ネットワークに引き込んだ。……10世紀も末になると、閩南人はイスラーム商人の船でイスラーム商人に従って東南アジア海域での交易を行い、11、12世紀には、彼らの先生であったイスラーム商人と肩を並べるまでに成長した」⁽¹⁴⁾と述べている。張氏の考えでは、1200年頃までには、閩南人は海洋貿易を彼らのライフスタイル（商貿習俗）として確立した。それは、航海技術や貿易のノウハウを含めた人的資源や財貨の蓄積が、王朝の財政を左右するまでになり、官の側からもそれなりの待遇を得られるようになって、海洋貿易が直接、富と名声を約束する職業になったからだとする。

これまでの定説では、閩南人が海外を目指したのは、閩南に平野が少なく、農耕に適していないため、食糧に窮し（つまり食いつめて）、やむを得ず海外に新天地を求めたとしていたが、閩南への漢族の入植と閩南の開発は、最初から海洋貿易に依拠していた。中国の他の地域のように、農業経済が進んだのちに商業経済、そして対外貿易へと移行したものではない⁽¹⁵⁾。閩南人がその後数世紀にわたって海洋貿易を「習俗」とするまでに身につけることができたのは、イスラーム商人との交流があったからである。多くの閩南人にとって、漢化とイスラームの影響は同時であった。筆

者は、この頃（西暦 1000 年前後）を今に続く「閩南人」の紀元と考えている。即ち台湾千年史である。

七. 海商と海盜・倭寇

海洋貿易は、商品の各地域における産出の有無、流通の多寡による格差を、船による商品の移動によって差益と化し、航海にともなうあらゆるリスクを差し引いても余りある莫大な利益を得ることを目的とする。中国沿海を拠点として活躍したこのような貿易集団を、「海商」と称する。海商の敵（リスク）は、暴風等自然災害を除けば、積載する商品、乗員の命、又は船そのものを略奪する海賊——中国では「海盜」と称する——である。16、17 世紀に中国沿海を荒らし回った倭寇（後期倭寇と称する）は、15 世紀のそれとは違い、主要メンバーは漢族であったから、これも実質は「海盜」であった。

海盜、倭寇は、現代の法律、倫理観では犯罪集団であり、彼ら自身、自らの記録を残すことがなかったから、歴史の外縁に追いやられ、マイナスイメージで語られるのは仕方がない。しかし、海洋史観からこの時代の歴史を語るなら、彼らはやはり主人公なのである。

『籌海圖篇』巻 11「経略一、叙寇原」に胡宗憲（1512～1565）の言として「寇と商とは同じく是れ人也。市を通ずれば、則ち寇は転じて商となる。市を禁ずれば則ち商は転じて寇となる。始めの禁は商を禁じ、後の禁は寇を禁ずる」とある。つまり海商と倭寇は同一人の両面であり、官が市（交易）を禁ずれば倭寇となり、市を通ずれば（交易を許せば）、海商となる。胡宗憲は明代の武将で、浙直総督として、倭寇討伐の最前線にいた。日本の平戸を拠点とした海商・倭寇のリーダーであった王直⁽¹⁶⁾を懐柔して帰順させたのは彼であり、朝廷の命で処刑したのも彼であった。その後、倭寇（海商）と官との板挟みになり、また海禁政策の緩和を訴えたこ

とで、朝廷に疑われ、最後は獄中で自殺する。胡宗憲の言と胡宗憲の生涯は、海商、海盜・倭寇とさらに官を加えた複雑な関係を象徴する。海商、海盜・倭寇は、閩南の官、民と深くかわり、常に敵対関係にあったわけではない。いやむしろほとんどの期間、利害を共有する間柄であった⁽¹⁷⁾。鄭成功の父・鄭芝龍のように、海商が倭寇になったばかりでなく、その倭寇がそのまま王朝の海上保安の任に就くこともあったのだ。

東アジア海域の主人公は、イスラームから、彼ら海商、海盜・倭寇、そして西ヨーロッパに移ったが、時期により遠慮がち（自身の軍事力不足による）であったこともあるが、その膨大な利益に見合ったリスクがあり、そのリスクに見合った（と彼らは皆そう考えたであろう）暴力（殺人、略奪）は常に存在した。おとなしく交易しないからだという理屈も常に存在した。確かにその方が恒常的な利益を上げられたはずだから。そもそも海賊を歴史から排除すれば、16世紀から20世紀前半までの西欧の植民地主義や帝国主義もほとんど歴史から排除しなければならない。名称は違うがやっていたことは同じである。背景に国家があったかどうか、活動に当たって組織、名分があったかどうか、記録があったかどうかの違いである。19世紀に入って海賊が減ったのは、商人と軍人、商船と軍艦が分業したに過ぎない。陸地史観を併せて言うならば「勝てば官軍負ければ賊軍」ということである。少なくとも、本稿の主人公・閩南人は、祖先に海賊がいたことを恥じる必要はない。

次に、宋代から清代までの閩南と閩南人の歴史を、主に海洋貿易の変遷から概説する。

八. 閩南人略史

1. 宋代（960～1279）——イスラームとの出会いから

宋代の中国は、北方に遼、金等の外族の圧迫があり、陸路をふさがれ

て、財政面で海洋貿易に頼る必要があった。またこのころ、南洋にシュリーヴィジャヤ等のイスラーム王朝が出現し、交易はなおさらに活発となった。1104年にはイスラーム商人に、港湾だけでなく他の地域や首都開封での交易も許した。唐代714年、揚州に置かれた市舶使は、市舶司と名を改めて広州（971年）に置かれ、その後、杭州、明州（寧波）に、少し遅れて閩南・泉州にも置かれた（1087年）。外国貿易に関わる業務（主に関税の徴収や外国商人の管理）を司る職掌であるが、泉州に置かれてから質量ともに大きく発展する。

網野善彦が斬新な視点から日本の中世史を描いた『海の国の中世』⁽¹⁸⁾は、宋商・朱仁聡ら「唐人」の若狭到着（995年）から稿を始めている。朱仁聡は、日本の役人に乱暴をはたらいたことが知られている。その後も続いた宋商の来訪にともない、交易や待遇に関する紛糾や、宋商の殺害事件も起こった。永保二（1082）年に宋商楊宥が白河上皇に鸚鵡を献上した記録もあるように、宋商との関係（利害）は密接であった。宋商が閩南から来たのかどうかの記録はないが、イスラーム商人のもたらした文物は、泉州を経由して日本に運ばれたものと推測できる。

泉州人が最初に確認できるのは1105年、九州の志賀島に來航した船の船主李充である。彼は明州（寧波）の市舶司で正式に出港許可書を得た海商であった。また『高麗史』所載の宋商の記録では、1017～1059年において、出身地が判明する商人21人のうち10人が泉州人、2人が福州人であった⁽¹⁹⁾。閩南人は、伝統的な東南アジア海域のほか、北上して日本、朝鮮との貿易を果敢に展開していたのである。

1127年、杭州遷都以降（これ以降を南宋と称する）、海洋貿易は、さらに王朝の死活問題となった。南宋初年における市舶収入は、朝廷の全歳入のかかなりの部分に達したといわれる。当初は一定の場所に限られていた外国人居留地は、城内に雑居する形になった。広州や海南島には、南洋イスラーム諸国から、ムスリムの集団移住も行われている。

『泉州府志』という泉州の地方誌に「回半城」「蒲半街」という言葉がある。「回」はムスリム、「半城」の城は泉州城内を指す。つまりムスリムが住民の半分いたということである。また「蒲半街」の「蒲」は泉州で著名なムスリムの一族。清浄寺（モスク）のある塗門街の半分がその一族の邸宅であったという意味である。その一族から出た蒲寿庚は、桑原隲藏の『蒲寿庚の事蹟』⁽²⁰⁾で名高い豪商である。南宋末に、30年にわたり市舶司を勤めた。陳尚勝によれば、市舶司制度は、藩商と呼ばれたイスラーム商人と泉州地方行政官の渉外業務における権力を増大させ、かなりの外交、貿易案件が彼らの自己裁量にまかされていたという⁽²¹⁾。元のクビライが1260年、南宋王朝を攻めたとき、蒲寿庚は元側に付き、福建を拠点とする南宋王朝再興の望みを絶ったとされる。その実力は海を背負って一王朝の命運を決するほどのものであった。

海洋貿易のほかに宋代の閩南が中国史に影響を与えたのは、「閩学」とも称された朱子学である。創始者である朱熹（1130～1200）は、閩南の龍溪に生まれ、生涯のほとんどを閩南で過ごしている。19歳で進士合格後の初任地は泉州である。隣の漳州では知事に任じた。他でもない、先に述べた東方イスラームの一大拠点としてイスラーム商人が全盛を極めたその時その場所に、彼は居たのである。朱子学はこの時代に形成され、儒教の系譜に新時代を画するものとして新儒学と呼ばれた。

朱熹の教説は当初、その斬新さゆえに異端、偽学とされた。朱熹の著作の中にはイスラーム等外来宗教に関する記述は見当たらないが、イスラームやマニ教（ペルシャ伝来の宗教）からの影響を指摘する研究者もいる。

閩学、新儒学、又は朱子学と称されるに至る朱熹の、後世に与えた影響は、私見によれば、大きく分けて三つある。第一にいわゆる理学の創始である。儒教に形而上学を持ち込み、体系的な宇宙論を構築してそれを修養の階梯と結合させた。第二に「家礼」の編纂によって士大夫層ばかりでなく一般庶民にも遵守できる具体的な生活規範を定めたこと。そして第三に

『資治通鑑綱目』の編纂等に見られるように、歴史を自覚させることで民族意識、国防意識を高めた。いわゆる尊王攘夷である。そのいずれについても、朱熹やその後継者たちは、それを孔子の道、周公礼楽の継承、復興と考えたが、実は儒教本来のあり方とはかなり違うと言わねばならない。

ここでは、閩南人に大きな影響を与えた「家礼」について述べる。家礼とは、氏族社会を背景とした孔子のめざした礼——それは宮廷の儀礼はともかく、士大夫、庶民の生活からはかけ離れたものになっていた——を、理想ではなく実行可能な行為に改めたものである。朱熹の大胆な解釈により、礼の根本にある宗法（血族集団—宗族の生活規範）は、庶民一般の生活を律するものとして、中国全土に広がり、民族の紐帯として機能するようになったが、この新たな礼、新たな宗法をもっとも忠実に実践し、現実的な改変を加えたのは、朱子の同郷、つまり閩南人であった（逆に朱子がその実態を理論化した可能性もある）。朱子学を伝統の呪縛の代名詞のように言うのは近代以降のことであって、朝鮮や日本でさえ受容するにいたったのは、それが实际的だったからである。

陳啓鐘の分析⁽²²⁾によれば、本来、宗族の指導者（宗子＝族長）は、能力の如何によらず長子相続でなければならないが、閩南の宗法は祭政分離（つまり祖先祭祀と宗族管理事務の分業化）の傾向があり、そればかりか一族中の有力者が族長になる場合もあるという。つまり系譜上の血縁関係よりも当地社会における一族の地位繁栄を重視する。一族の成員であることがそのまま生活上の利益につながるから、宗族の団結は強く、対外的には利益団体として機能する。個人は進んで宗族の活動に参加するようになるのだという。陳氏はそれを、入植時の閩南には耕地が少なく、個々人が貿易等に従事して実力を養わなければならなかったため、その生活の拠り所として利益団体を必要としていたからだと分析する。確かに現在海外に分布する華僑の同族同郷等さまざまな団体に相通ずるところがある。

朱子学に外来宗教の影響が指摘されるように、閩南にはさまざまな宗教

が起こり、ときに混合しながら長く生命を保っている。閩南にはムスリムであるイスラーム商人（アラビア人、ペルシャ人、インド人、南洋イスラーム諸国のマレー人）のほか、非ムスリムの商人も往来した。ヒンズー教、マニ教、ネストリウス派キリスト教の伝来は、墓誌等で確認されている。もとよりイスラームに改宗した閩南人もいた。革新的な儒者として知られる李卓吾は改宗したムスリムの子孫である。個々の宗教宗派について筆者は無知であるが、一つだけ閩南人の信仰心の深さを象徴する例を挙げる。

マニ教は、紀元2世紀にペルシャでマニが創始した宗教であるが、のちローマ帝国で盛行し、世界宗教の一つとなった。694年に唐代の中国に入って公認されるが、845年、唐武帝による「道教一尊」（道教の国教化）によって都から追放された。マニ教はその後中国国内で流転を繰り返し、福建省でわずかに存続したが、魔教と称され、宋代では弾圧の対象であった。当然ながら絶滅したと考えられていたが、1950年代、福建省泉州郊外の一寺院（草庵）が、マニ教の寺院であることが知られるようになり、文化財の指定を受けた。1980年代には国外でも注目され、1987年にスウェーデンで開かれた第一回国際マニ教シンポジウムにおいて、世界に唯一残存する古代マニ教寺院の遺跡と認められた。寺院の境内には、教祖マニの画像がある。その画像は髭を生やした普通の格好で、現地の住人はちょっと変わった仏様だと思いながらも、大切に供養していた。福建省内には他にもマニ教に縁のある遺跡がいくつか残っている⁽²³⁾。

なお、現在泉州には約5万人、福建省全体で約11万人の回族（イスラーム信仰を根拠とした少数民族。ほとんどがアラビア、ペルシャ人の末裔）がいる。同省のモスク（清真寺）が五つしかない現実を見れば、信仰を維持している回族はおそらく数千人であろう。古い家系ではすでに千年を閲している。信仰を失ったことよりも、ムスリムであった先祖の記憶を持つ人がこれほど残っているのは驚くばかりである。外来宗教に対する寛

容な風土がそれを許しているのであろう。

2. 元代（1271～1368）——世界最大の貿易港・泉州

モンゴル帝国の出現は、イスラーム商人にとって中国への安全な通商路の確保を意味した。1263年前後には元の都（大都）に2953世帯のムスリムがおり、そのほとんどは富商であったという。『蒙古史』の記述の中では、ムスリムは「Sautaghul」即ち商売に長けた民族と訳されている。

イスラーム商人の拠点として、泉州の繁栄は続いた。外来民族モンゴル人の支配下になると、泉州の特殊性はさらに顕著となり、「泉州城内の南地区に集中居住していた外国商人は、主にアラビア人、ベルシャ人、及びインド人、ヨーロッパ人であったが、彼らと元王朝の統治者であるモンゴル人は、ともに泉州を統治するための域外団体（foreign community）を形成していた」⁽²⁴⁾という。泉州は元代において、外国文化の影響どころか、実質的に諸外国からやってきて当地に定住した外国人によって管理されていたことになる。

元代に泉州を訪れたマルコ・ポーロ（1254～1324）は、この地に咲き誇る刺桐にちなんで泉州を「ザイトン」と称した。このマルコ・ポーロも、その後この地を訪れたイスラームの旅行家イブン・バトゥータ（1304～1368）⁽²⁵⁾も、泉州をアレキサンドリアと並ぶ世界最大港の一つと感嘆している⁽²⁶⁾。14世紀に入っても東アジア航路でもっとも活躍していたのは、閩南人であった。

3. 明代（1368～1644）——海禁と倭寇

明朝は、モンゴル・元の支配を脱した漢民族による民族主義的閉鎖的王朝であったとされてきた。その根拠は、太祖洪武帝が祖法と定めた「海禁」——海外渡航の禁止——である。しかし海禁はあくまで民間人に対するものであって、官営のいわゆる朝貢貿易は、かえって盛んに行われてい

た。鄭和艦隊の7回（1405～1433）に及ぶ外洋派遣はそのピークであった。その後朝貢貿易は急速に衰える。「海商」とヨーロッパ商人の出番であった。

前掲の張彬村によれば、閩南商人たちは、「海禁」政策の下でもその「商貿習俗」を持ちつづけ、イスラーム商人が撤退したあと、主の居なくなった海洋ビジネスの拠点を大いに利用して活躍の場を広げていったという⁽²⁷⁾。

ポルトガルのバスコ・ダ・ガマが15世紀末、喜望峰を回りカリカットに到達するインド航路を開くと、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人が次々とアジアを目指した。「ヨーロッパ人の東南アジアへの侵略と争奪戦は、ヨーロッパにおける彼らの争奪戦の延長と反映であった」⁽²⁸⁾が、東南アジア海域は、無主の海ではなかった。ヨーロッパ商人は、イスラーム商人が築き、閩南商人が維持、拡大したネットワークを利用して、アジア進出を果たしたのである。

海商について貴重な資料がある。1604年に朝鮮半島へ漂着した朱印船があった。長崎や薩摩に住んでいた漢族などと共同で出したもので、家康から朱印状と銀500両の貿易資本を提供されていた。乗員は、日本人、漢族とポルトガル人。漢族の一人は閩南人・温進といい、当時25歳。漳州府海澄県の出身であった。前年2月に貿易のため福建からベトナムの交趾に向かったが、上陸直前に倭船に襲撃され、100余名は殺され生存者はわずか28名となり、温進たちは、のちカンボジアに向かい、象牙、皮もの、蘇木、犀の角などを購入して日本に向かった。ポルトガル人はマカオとカンボジアの貿易に従事したという⁽²⁹⁾。閩南人と日本人とポルトガル人が共同して海洋貿易に従事していた事例である。

同じころ活躍した閩南の海商に李旦がいる。福建省泉州の人で、はじめマニラを拠点とするが、のちに日本の平戸に移住。そこで前述の海商・倭寇である王直の配下となったが、王直の死後、彼が築いた貿易ルートを受

け継ぎ、幕府から朱印状を得て朱印船貿易に携わり、12隻の船を渡航させるまでになった。後述する顔思齊や鄭芝龍は、この李旦の配下であった。

1624年、オランダが台湾に拠点を持つ最初のきっかけは、明朝との妥協であった。オランダは1622年に澎湖諸島を占拠し、城壁を築き始めるが、澎湖諸島は12世紀の宋の時代から漢族が定住しており、元の時代には帝国の版図に組み込まれていたため、明朝としてもオランダ人の占拠を許すことはできず、出兵してオランダ人を撤退させた。その代りに、台湾を拠点とすることを黙認したために、オランダは台湾に拠点を移したのである。

当時、西洋（ポルトガル、スペイン、オランダ）は軍事的にも経済的にも優位に立ってはいなかった。彼らが拠点を作りえたのは、もちろん築城技術や大砲、造船技術に一日の長があったからでもあるが、何よりも、重商主義を取り、海洋貿易には本国の存亡がかかっていたためである。オランダの場合は、東インド会社を中心とする経営システム（統治システムではない）と、それを操作するオランダ人職員の優秀さ、そしてプロ集団となっていた軍人（傭兵も多い）がいたこと等の優位を挙げることができる。いずれにしても洋の東西に隔絶した実力の差はなく、商売についていえば共通の知識と、ほぼ相互に遵守できる商習慣があったといえる。交易が時に、また人によって略奪になることも含めて、「商習慣」はそれほど隔絶していない。つまり彼ら同士、意思の疎通が可能であり、民族や国籍、言語の違いは少なくとも最も大事な要素ではなかった。

オランダが拠点とする前にも、閩南人はすでに各地で海洋貿易を行っていたのに、つい目と鼻の先の台湾へ大挙おしかけることはなかった。台湾海峡が、大陸棚の上にあるため、水深が50メートル前後と浅く、加えて海峡には「黒水溝」（寒流）と「紅水溝」（暖流）が流れ、帆船時代には航海の難所だったためだと言われている。

それでも、閩南の海商・倭寇の中には、この地を拠点とする者がいた。顔思齊とその後継者となった鄭芝龍である。彼らはオランダが安平に拠点を設ける少し前、安平の北、北港を貿易の拠点としたばかりでなく、対岸閩南地方から移民を募り、開墾を始めている。オランダ人に労働力を提供したのは彼らであり、それは純粹に商売として行われ、有力な資金源となっていた⁽³⁰⁾。

1624年から1661年の38年間はオランダ統治時代と呼ばれる。オランダ東インド会社の統治が及んだ範囲は決して小さいものではなかったと最近の研究は示している。オランダ人が作った戸籍表によると、1650年には315の原住民集落に支配が及び、登録された人口は約6万9,000人。これは、当時の原住民人口の4、50パーセントに当たると推計される。漢族人口は、オランダ東インド会社の積極的な勧誘によって移民が急速に増加し、オランダ統治末期には3万5,000から5万人に達していたと考えられている⁽³¹⁾。

オランダ人の台湾経営は、当初は、倭寇と同じく、鹿皮、鹿肉、干魚などの輸出が主であった。のち、農産物の栽培（甘蔗等）を、大陸から来た漢族にやらせるようになったが、目的はあくまで重商主義に基づく利潤追求であった⁽³²⁾。

4. 清代（1683～1911）——閩南人移民社会の形成

鄭芝龍の子・鄭成功は父親とは違い、朱子学（閩学）を学び尊王攘夷を奉ずる儒生であった⁽³³⁾。栄耀栄華と功利を追求して変節を重ねた父とは正反対の生涯を送った。鄭成功が「反清復明」を唱え、大陸での北伐に失敗し、台湾を清朝反攻の基地としたところから、1949年の国民党政権の台湾移転との類似を指摘した台湾の史家もいたが、鄭成功の台湾統治は、台湾に中国風の「政治」を持ち込んだとは言えるが、漢族の統治である以上に、それは閩南人の統治であった。鄭成功自身、日本で生まれたとはい

え、青年期を泉州で過ごし、閩南は最後まで彼の拠点であった。鄭成功の率いる部隊は、父・鄭芝龍を引き継いだものであり、それは遑れば王直、そして李旦が海商又は倭寇として率いていた部隊である。鄭成功がいなければ、そして明朝が崩壊の危機になれば、倭寇で終わってしまっていた集団である。

厦門大学の莊景輝は、「海峡兩岸のムスリム一族の發展と交流」のテーマで、台湾に渡った福建省陳埭の回族・丁氏一族の17世紀から現在までの足跡を、台湾の鹿港、台西でのフィールドワークをもとに追跡した。1989年、スタンフォード大学、台湾中央研究院、厦門大学の共同研究プロジェクト「閩台社会文化比較研究」に端を発している。本稿で述べてきたイスラームと閩南人との関係を象徴する事例として、最後に紹介したい。

福建最大の回族郷（ムスリム居住地域）である陳埭における丁姓人口は、約2万。先祖はアラビア渡来のムスリムで、南宋の時代に泉州に移ってから二七代を数える。元代の末年に陳埭に移り住んだ。全国でも有数の「億元戸」と称され、丁氏一族は今も繁栄を誇っている。

丁氏の一支族がはじめて台湾に渡ったのは明代末。それ以来、数代にわたり移民を繰り返し、台湾西岸の鹿港、台西を中心に台湾各地に定住した。莊氏によれば、渡台の目的は（1）少時学賈東欧州壯歳経営台郡（若い時には東欧で商売を習い壮年に成ってから台湾で企業経営に当たる）、（2）出住台湾大埔林（台湾の農地を開墾し、農場主となる）、（3）入台庠（台湾の学校に入学する）の三つで、これは台湾移民の典型的な例であるという。（3）は、清朝時代に台湾籍の子弟を対象に設けられた「進士」の優先枠を当てに多くの福建子弟が台湾に渡ったことを指すものである。

台湾に渡った丁氏一族は、対岸との貿易に従事するほか、それによって得た利益で台湾に不動産を購入し、手広く各種事業を展開した。現在台湾に居住する丁姓の人口は約3万5,000人。うち三分の二が陳埭丁氏の後裔と認められるという。

台湾における丁氏一族のこの繁栄をもたらした最大の要因は、子弟教育の重視にあったと言われる。明清時代を通じて進士一四人、挙人二七人を輩出している。台湾名族との通婚はさらにその勢力を高めた。

九. おわりに

以上述べてきたように、台湾で最大多数を占める閩南人は、中国の他の地域と比較して、際立ってユニークな歴史を経てきた。従来のオーソドックスな中国史から見れば辺境の漢族であり、その意味で、台湾の閩南人がいわゆる「中華」とは違うと主張するのには理由があるが、しかし、同じ中華の版図の中に大陸中国とは別に海洋中国というものがあったとすれば、閩南人は間違いなくその主人公である。前述したところをまとめれば、閩南人の（歴史的な）特徴として、次の諸点が挙げられる。

1. 10～17世紀、外国人ともっとも接触が多い漢族であった。人的交流は、他の省の漢族との接触よりも外国人の方がはるかに濃密であり、イスラーム（アラブ人、ペルシャ人、インド人）、ヨーロッパ（ポルトガル人、スペイン人、オランダ人）の文化、技術、宗教を積極的に吸収したコスモポリタンであった。
2. イスラーム商人の影響により、海洋貿易を生活スタイルとした。
3. 信仰心が強く、あらゆる宗教に熱心、寛容であった。
4. 革新的な儒学（朱子学）を最もよく吸収し、とくに庶民化した宗法制度を実践した。それにより血縁、職能による団結力が強かった。

なお、本ノートで閩南人について行った考察は、今後、台湾の他の族群（客家人、原住民）についても、行うつもりである。「客家」は地理的概念ではない。日本統治時代は閩南人とともに「本島人」であったし、広東人と理解された。清朝時代における「客」が土着に対する文字通りの「客」

であって、そのまま客家人と見なせないことも分かってきた。その起源については中原起源説、土着起源説等、まだ定論を見ない部分が多い。

原住民については、加えて考古学的考証も必要であろう。西暦紀元ころから17世紀までの文物を出土する十三行遺跡には、この文化を担った原住民が、製鉄技術を持ち、農耕生活を送り、海洋貿易を行っていた証拠が残されている。他虐史観や疎外史観から徹底的に離れ、また社会進化論のようになりニアな視点に惑わされない独自の文明論としての考察が必要だと思う。それは現在、台湾で求められている多元、多様なあり方を深化させる契機になるかもしれない。

《注》

- (1) 『臺灣史研究文献類目 2011 年度』（中央研究院台湾史研究所編、2012 年 12 月）の書目統計によれば、当年度の専門書、論文のテーマを時代で分類すると、早期（明代以前）25 件、清代 82 件、日本時代 383 件、戦後 322 件であった。直近の統計では戦後が日本時代を若干上回る。
- (2) 拓殖大学は 2016 年、海外事情研究所付属台湾研究センターを設置し、それに先駆けて国際協力研究機構創設のパイロット研究プロジェクトとして着手された「地域開発モデルとしての台湾」を引き継いだ。台湾の今日の成功がどのような条件、基礎のもとに、また、どのような経緯をたどって実現されたかを、地域発展の問題を解明するための事例として、より普遍的な視点でとらえることを指針とした。1900 年に台湾協会学校として、台湾開発に献身する人材養成のために設立された拓殖大学にとって、第一に検証すべきは日本統治時代であることは自明のことであったが、普遍的な視点でとらえれば、初期条件、基礎とすべき要件が、日本統治時代ばかりでなく、その前後に及ぶこともまた提起されている。
- (3) 外務省外交文書 14 日清媾和条約締結一件 媾和条約 1084
- (4) 林淑美『清代台湾移住民社会の研究』（汲古書院、2017 年 7 月）「第五章『番割』と漢・蕃関係」参照
- (5) 拓殖大学海外事情研究所『海外事情』2018 年 1 月号 47 ページ掲載の筆者コラムより。
- (6) 前掲『清代台湾移住民社会の研究』の「第一章 だれが『客』なのか、だれが『土着』なのか？」は、台湾に関する史籍に見える「客」が、現代の

「客家」を指すとは限らないことを明らかにしている。例えば『諸羅県志』によれば、「諸羅県の小作人の多くは内地（広東省）の山間部から来た『潮人』（潮州人）で、彼らは『客』、彼らの居住聚落は『客荘』と呼ばれた」という（53 ページ）。近年の研究では、広東東部から台湾に渡った漢族は客家だけでなく、潮州人も少なくなかったことが指摘されている。志賀市子編『潮州人——華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学』（風響社、2018 年）等参照

- (7) 可児弘明、斯波義信、游仲勲編『華僑・華人事典』弘文堂、2002 年 6 月
- (8) 何綿山『閩文化概論』（北京大学出版社、1996 年 11 月）参照。中国の版図という意味なら、秦始皇帝の「閩中郡」設置が最初である。
- (9) 本段の「 」は、前掲『華僑・華人事典』からの引用
- (10) マラッカ海峡を掌握していた室利仏逝（シュリーヴィジャヤ王国）、「訶陵」（古マタラム王国）、三仏斉（マラッカ海峡地域における港市国家連合体）等からの朝貢の記録が見られる。朱傑勤『東南亜華僑史』（朱傑勤全集 IV、広西師範大学出版社、2011 年 1 月）等参照
- (11) 李興華・秦惠彬・馮今源・沙秋真『中国伊斯蘭教史』（中国社会科学出版社、1998 年 5 月）49、50 ページ
- (12) 2008 年 11 月泉州で開催された海上交通とイスラーム文化シンポジウムに提出された論文。原題は「宋代閩南海貿易の形成」。張彬村は、中央研究院海洋專題研究センター研究員（当時）。和訳は筆者
- (13) 同上
- (14) 同上
- (15) 『泉州府志』巻 20 に「蓋山海之利、居田之半也」、「田少海多、民以海為田」とある。
- (16) 王直については田中健夫『倭寇 海の歴史』（講談社学術文庫、2012 年 1 月）の「5 一六世紀の倭寇の活動と特質」に詳しい。
- (17) 中砂明德『中国近世の福建人 士大夫と出版人』（名古屋大学出版会、2012 年 2 月）の「第二章 明末の閩人」に、近世福建省の 300 年にわたる官、民、倭寇の複雑な関係史の記述がある。
- (18) 網野善彦『海の国の中世』平凡社、1997 年 11 月
- (19) 松浦章『中国の海商と海賊』山川出版社、2011 年 3 月。人数は、松浦作成の表による。
- (20) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』東洋文庫、1989 年。原刊は大正 12（1923）年、上海東亜研究会
- (21) 陳尚勝（山東大学歴史文化学院）「宋朝地方州府涉外作用の増強と東アジ

- ア貿易の拡張」, 海上交通とイスラーム文化シンポジウム（2008 年）提出論文
- (22) 陳啓鐘『明清閩南宗族意識的建構與強化』厦門大学出版社, 2009 年 1 月
- (23) 『中古三夷教弁証』（林悟殊著, 中華書局 2005 年 6 月）参照。泉州におけるマニ教の展開については黄展岳「摩尼教在泉州」『學術泉州』（中央文獻出版社, 2003 年 12 月）, 草庵に関する調査研究の経緯と成果については, 粘良図『晋江草庵研究』（厦門大学出版社, 2008 年 12 月）に詳しい。
- (24) 高致華・蔡瑞婷「泉州社会のイスラーム文化浸透を概述する」, 海上交通とイスラーム文化シンポジウム（2008 年）提出論文
- (25) Ibn Battūta. モロッコのタンジール生まれのイスラーム法学者, 旅行家。1325 年, 21 歳のとき世界旅行に出発し, エジプトを経てマッカを巡礼。イラン, シリア, キプチャク・ハン国, 中央アジア, インド, スマトラ, ジャワを経て中国泉州・大都に達した。一三四九年帰還。ただし実際は中国に到達していないとする学者も少なくない。家島彦一著『イブン・バトゥータの世界大旅行』（平凡社新書, 2003 年）等参照
- (26) 宋峴「泉州港は中国的“アラ伯走廊”」『學術泉州』（中央文獻出版社, 2003 年 12 月）は, 『アラビアン・ナイト』の物語の題材の多くが, 泉州で活躍したアラビア商人と直接関わると指摘している。
- (27) 前掲「宋代閩南海洋貿易の習俗はどのように形成されたか」
- (28) 朱傑勤『東南亞華僑史』（朱傑勤全集Ⅳ, 広西師範大学出版社, 2011 年 1 月。和訳は筆者
- (29) 松浦章『中国の海商と海賊』（山川出版社, 2003 年 12 月）
- (30) 楊合義『台湾の変遷史』軼軼社, 2018 年 4 月
- (31) 翁佳音, 黄駿『解碼台灣史 1550-1720』遠流出版, 2017 年 9 月
- (32) 前掲『台湾の変遷史』
- (33) 鄭成功来台後の閩学（朱子学）の台湾における普及, 発展については陳昭瑛『台湾儒学 起源, 発展とその変転』（風響社, 2016 年 12 月）に詳しい。日本の台湾領有後, 武装抗日軍の主力が儒生階級であったとして, 鄭政権以来の朱子学普及と庶民生活への浸透を指摘している点は, 特に必見